

II 白山麓の焼畑

橋 禮吉 (加能民俗の会)

1. 白山麓の焼畑

白山麓での焼畑呼称は、「ナギハタ」が優勢であり、さらに省略して「ナギ」と言う場合もある。焼畑が山地斜面で実施される場合が多いので、「ヤマバタ」とよぶ時もあり、また畝立てをしないで経営されることが多いので「畝がない」という意味をこめて、「ヘラバタ」とよぶ時もある。

かつて焼畑が盛んであった時代には、ヒエナギ(稗籾)、ナナギ(菜籾)、ソバナギ(蕎麦籾)の三つがあった。ヒエナギ・ナナギ・ソバナギの三者共に、火入れ初年目の作付け農作物を冠して、焼畑類型名を作っている。急峻な山地に立地する集落・出作りでは、平坦地稲作水田や緩斜地常畑に恵まれず、焼畑に依存してヒエ栽培をおこない、常畑栽培のヒエと共に、主穀を自給してきた。ヒエナギ・ナナギ・ソバナギの各概略・特色は、表1で示した。

表1 ヒエナギ・ナナギ・ソバナギの焼畑経営概略と特色

名 称		ヒエナギ	ナナギ	ソバナギ
機 能 特 色		*主食のヒエを最優先する主穀農耕 *最大規模は30俵収穫で約1町 *昭和30年代後半に衰退	*ダイコンは越冬野菜の主役、冬野菜栽培農業 *平均規模は約50歩 *現在も僅かに継続中	*ヒエナギ不作の時緊急に作る *ヒエナギの補助的農耕 *平年は、ソバは土地を荒らすとして、火入れは夏の上旬と重なるのでしない。
経 営 方 法	焼畑用地	*落葉広葉樹林 ・低木林 ネゾレワラ ・高木林 タチキワラ	*落葉広葉樹林 ・低木林 ネゾレワラ *草地 クサムツシ	ネゾレワラ クサムツシ
	伐採時期	火入れ前年の夏土用	火入れ当年が多い	火入れ当年
	火入れ時期	五月中～下旬	七月下～八月上旬	八月上～中旬
	一年目の作物と播種	ヒエに少量のアカカブラを入れて混播する。散播	ダイコンを主にアカカブラを従に散播(現在は条播)	ソバを散播
農耕地または条件の良い休耕地で作った農作物(表2に載せたものは除外)		ノミキビ(キビ)・トウキビ(トウモロコシ)・サツマイモ・ジャガイモ・カボチャ・ミズナ・カラシナ・ハクサイ・エドカブラ(スウェーデンカブ)・ゴボウ・アサ(大麻)・ミノギ・ネブ茶・ホウケ(ホウキグサ)・杉苗・山桑		

(橋, 1993より)



写真-1 ナナギの火入れ作業 (白峰村, 下田原セイシ山, 山口清太郎家の事例)

2. 焼畑の年次別作物

各谷筋における焼畑の三類型について、その具体的事例は、表2で示した。ヒエナギの作付け年数の長短は、焼畑地の肥沃度に影響された結果である。ヒエナギの作付け年数と栽培作物は、4年間作付けすることを原則とし、作物はヒエ・アワ・マメ(大豆)・アズキの順である。火入れ初年次のヒエは糯種がなく粳種だけで炊飯用であるが、粉にして団子にするとい晩生種「コウボウビエ」があった。二年次のアワは、糯種と粳種があり、一般的には粳種に重点をおき7~8割を粳種、2~3割を糯種で作付けしていた。3年次はマメ、4年次はアズキである。5年次以降は休閑する場合と、エイ(エゴマ)・ソバ等を作る場合があるが、このエイ作りは「捨て作り」と言い、収穫があれば儲けものとし、最初の播種時より標準作は期待しないようであった。

地力の劣っている時は、ヒエ・アワ・マメあるいはヒエ・アワ・アズキと3年間作付けして、4年次以降休閑する。対するに地力が肥えていると、作付け年数が長くなると同時に、作付け順(作付け体系)が異なってくる。白山麓の焼畑では、主食のヒエを最重視したから、地力に余裕のあると同一畑地に二度目のヒエをあてる。補足すれば、3年次・4年次・5年次のいずれかの年次に、ヒエを作るわけである。この2回目のヒエを「コナビエ」と言う。同一作物を、同一畑地で2回作付けする場合、補足すれば地力の良い状態の焼畑を「コナバタ」とか「クナバタ」と言い、火入れ初年のアラハタ(新畑)と区別する。関連して、コナバタ栽培のヒエ・アワを「コナビエ」「コナアワ」と言い、アラハタのヒエすなわち「アラビエ」(アラハタビエ)と区別する。アラビエは散播するが、コナビエは散播の時もあれば、苗移植の時もあった。

ナナギの作付け年数や作付け順は、ヒエナギと同じく焼畑地の肥沃度差に影響される。牛首川水系では、初年次はダイコンを作り、2年次以降はヒエナギの作付体系を引き継ぐように、ヒエ・アワ・豆類の順である。大日川水系のナナギでは、2年次以降には牛首川のような体系的特色が顕著でない。牛首川・大日川水系に共通することは、ダイコンはヒエより肥料分を多く吸収する

表2 焼畑の年次別作付け体系—その1：牛首川水系・白峰村の場合

耕作地	耕作者 (生年)	焼畑名称	1年次	2年次	3年次	4年次	5年次	6年次	備考
赤岩	山下石松 (明治37)	ヒエナギ	ヒエ	アワ	マメ	アズキ	ソバ	休閒	ソバナギは土地を荒らすのでしなかった
		ナナギ	ダイコン	アワかアズキ	アズキ	ソバ	休閒	休閒	
河内谷	藤部仁三 (明治43)	ヒエナギ	ヒエ	アワ	マメかエイ	アズキ	休閒かソバ	休閒	エイとはエゴマのこと
		ナナギ	アワかヒエ	マメ	アズキ	休閒	休閒	休閒	
		ソバナギ	ソバ	アワかヒエ	休閒	休閒	休閒	休閒	
大杉谷 苛原	長坂吉之助 (明治28)	ヒエナギ	ヒエ	アワ	マメ	コナヒエかソバアワ	エイかソバ	休閒	
		ナナギ	ダイコン	アワかヒエ	アズキ	ソバ	休閒	休閒	
大杉谷 大空	愛宕富士 (明治39)	ヒエナギ	ヒエ	アワ	マメ	アズキ	エイかソバ	休閒	
		ナナギ	ダイコン	ヒエ	アワ	マメかアズキ	ソバかコナヒエ	休閒	
		ソバナギ	ソバ	ヒエかソバ	マメかアズキ	休閒	休閒	休閒	
小赤谷	織田喜市郎 (明治42)	ヒエナギ	ヒエ	アワ	同上	コナヒエ	ソバ	休閒	
		ナナギ	ダイコン	アワ	同上	休閒	休閒	休閒	
		ソバナギ	ソバ	アワ	同上	休閒	休閒	休閒	
下田原	山口清太郎 (明治36)	ヒエナギ	ヒエ	アワ	マメ	ウエビエ	アズキ	エイ	ソバナギは夏麦の農繁期と重なり作らなかつた
		ナナギ	ダイコン	マメかアズキ	アワ	休閒	休閒	休閒	

(橘, 1991より)

作物として、ナナギの作付年数はヒエナギより短いのが基本原則のようである。

ヒエ→アワ→マメ→アズキの作付け体系、すなわち火入れから4年間耕作し、5年次以降休閒する体系について、焼畑体験者は、全作業工程上も、先祖が試行錯誤を繰り返して体験的に残してくれた、最良の慣行だと位置付けている。2年次のアワ栽培の理由として、「アワはヒエからの灰を好む」とし、2年次のあわ畑に先だちヒエから焼きを義務づけている。3年次のマメ畑では、アワから焼きは絶対行わない。アワがらをそのままに放置した畑地にマメを播種、耕起の後「ソゾロ」という整地作業を行ない、アワがらを地表面に広げて、種子を隠す手だてをする。ソゾロでは、マメの新芽が野鳥の目にとまらないように、さらに野鳥が新芽をついばみにくいように、アワがらを利用するのである。4年次のアズキ畑に関して、「アズキは草の中に播く」という語彙がある。4年次の畑地は、2・3年次より草が生い繁る。アズキ播種後の耕起では、鋤で草を打ち切って地表に広げて緑肥を兼ね、さらに鳥害予防策にもした。

表2 焼畑の年次別作付け体系—その2：大日川水系・旧新丸村（小松市新丸地区）の場合

耕作地	耕作者 (生年)	焼畑名称	1年次	2年次	3年次	4年次	5年次	6年次	備考
新保出 (木地 小屋)	道見鎌助 (明治38)	ヒエナギ	ヒエ	アワ	アズキ	マメか 休閒	休閒	休閒	地力が残って いるとマメを 作った。
		ナナギ	ダイコン	アワ	シャガモ	休閒	休閒	休閒	
		ソバナギ	ソバ	サトイモ	休閒	休閒	休閒	休閒	
須納谷 (花立)	橋爪忠一 (明治32)	ヒエナギ	ヒエ	アワ	アズキ→マメ コナビエ→休閒	休閒	休閒	休閒	コナビエは播 種せず移植し た。
		ナナギ	ダイコン	ソバ	休閒	休閒	休閒	休閒	
小原	伊藤常次郎 (大正11)	ヒエナギ	ヒエ	アワ	マメ	アズキ	コナビエ	カモ	コナビエ、カ モ(シコクビ エ)は移植す る。ヒエナギ 7年次はエイ 移植、8年次 は休閒。
		ナナギ	ダイコン	ダイコン	ダイコン	マメか アズキ	休閒	休閒	
		ソバナギ	ソバ	マメか アズキ	休閒	休閒	休閒	休閒	
杖 (津江)	仲間菊能 (明治44)	ヒエナギ	ヒエ	アワ	マメ	アズキ	コナアワか 休閒	休閒	
		ナナギ	ダイコン	マメ	アズキ	休閒	休閒	休閒	

(橋, 1983より)

表2 焼畑の年次別作付け体系—その3：焼畑圃場の地力差による年次別作付け体系
(白峰村大杉谷, 長坂吉之助家の場合)

圃場の肥沃度	1年次	2年次	3年次	4年次	5年次	6年次	7年次
上(肥えている)	ヒエ	アワ	マメ	アズキ	コナビエ	アズキ	エイか ソバ
中(普通)	ヒエ	アワ	マメ	コナビエか コナアワ	エイか ソバ	休閒	休閒
下(やせている)	ヒエ	アワ	マメ	アズキ	休閒	休閒	休閒


菅原清康氏は、焼畑の年次別作付け体系に関して、「火入れ後1・2年地力の消耗しない早い時期に主食となるものを作付けする。3・4年目は初年の作付け作物を基準として選ぶが、この際作物の生態的特性(すなわち少肥でも耐えられるもの、たとえば根瘤菌の作用で空中窒素の固定がはかられて収量が確保できる豆類)を考慮している。」と指摘している(菅原清康 1980)。白峰村のそれは、地力の良い状態のアラハタでは主食のヒエを、2年次ではヒエを補うアワを作る。3・4年次は、少肥で短い期間で作れ、しかも根瘤菌で自前で窒素を固定できる豆類を作る。この年次別組み合わせは、菅原の指摘事例そのものである。

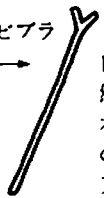
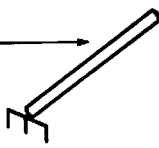
焼畑の年次別作付け農作物を説明する際、従来は「輪作体系」あるいは「輪作類型」等の語彙を使って説明する場合があった。焼畑が現実的に消滅し歴史的になりつつある今日、この輪作体系という語彙は、誤解されることが多くなってきた。白山麓の焼畑に事例をとれば1年次ヒエ、

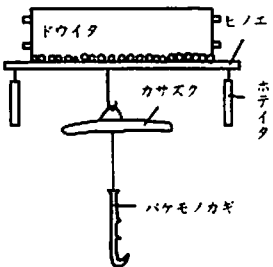
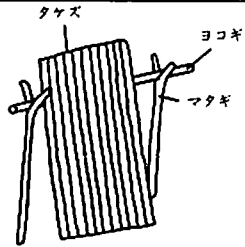
2年次アワ、3年次マメ、4年次アズキ、5年次以降休閑するという工程があるとする、誤解の内容は二種類ある。まず、伐採・火入れで畑地を造成し、その畑地を五つに分画し、ヒエ・アワ・マメ・アズキ・休閑地と循環的に輪作して常畑としているとの誤解がある。次のは、1回の火入れ後畑地を五つに分画し、ヒエ・アワ・マメ・アズキと5年間輪作して一巡した後、6年次に火入れをして新圃場を造成すると理解しているものである。すなわち、6年毎に火入れして焼畑を経営するという誤解である。白山麓の焼畑は、毎年火入れを実施して5年間耕作し、毎年休閑地を作っていくという工程である。日本の焼畑は、白山麓のように毎年火入れをし、毎年耕地を放棄し休閑地を作るという方式である。したがって安定的焼畑を経営するためには、広大な山地(焼畑適地)面積が必要なため、白山麓の焼畑は山地に散居村的に、冬も夏も孤立的に生活する居住方式すなわち出作りという慣行で経営しているわけである。このような一連の理由で、「焼畑の輪作体系」という語彙は意識して避け、「焼畑の年次別作付け体系」とか「焼畑の年次別作物」という語彙を使用して説明した。

同じ耕作者でも、焼畑圃場の肥沃度の差によって、耕作年数(休閑年数までの年数)や年次別作物の違いがあり、その事例は表2の3で示した。

表3 旧新丸村小原の焼畑耕作と使用農具一覧(ヒエナギ1年次のヒエ栽培の場合)

工 程	小 工 程	使 用 農 具	備 考
1. ナギカリ (伐採)	儀 礼 伐 採	ゴヘイ(ウツギの枝とササの葉) ガンド・ガンドサヤ・ヨキ・ヨキノフンドシ テノコ・テノコサヤ・ナタ・ナタカゴ シジメガマ(40匁カマ)	・ヨキは350匁・400匁、 450匁の3種があり、350 匁を「エダウチ」、450匁 を「ネキリ」と称し、ナギ カリにはエダウチを使用し た。
2. ヤキシロツクリ 適宜な長さに伐 り、燃料索として の木を等高線状に 山積みする		ガンド・ナタ・シジメガマ ホッタテボウ・ネンボグワ	・ネンボグワで、周囲の草を そぎ、防火帯を作る。 また、ヤマイモ採取の跡穴 を埋める。
3. ナカガエシ 地面に接したヤキ シロは、湿気が抜 けないので、上下 をひっくり返し て、乾燥を良くす る。		ナタ・ハネアゲ→ 	・ハネアゲとは、木の又を利用 したもので、ヤキシバの 上下をひっくり返す。
4. ナギヤキ (火入れ)	儀 礼 現地です火を 起こす時	ビンボウトツクリ・タカジョウシ・ケンガ ヒウチイシ・ヒウチガネ・ホクソ ヒウチダイ・キセロ・インロウ・ツケギ タイマツ	・ウツギ・ササを使用した時 は、タカジョウシ・ケンガ は使用しない。

工 程	小 工 程	使 用 農 具	備 考
	家より火を運ぶ時 火入れ 緊急時の消火道具 仕事着	ヒダネット・ヒダネカブ・アサギ・タイマツ イブリ・ナギマタ・ナタ・ナタカゴ・クサビ ヘラ ヒバイ バレン 男 ヒノキガサ・サックリ・サックリモモヒキ シナハバキ・ホソグクリ・ワラジ アセフキ 女 ヒノキガサ・ミジカベ・ユキバカマ・ キャノハン・コテ・ワラジ・アセフキ	<ul style="list-style-type: none"> クサビが燃えてしまうので、ナタカゴの中へ入れておく ヘラの子備を谷川につけておく ヒバイとは、布切れを棒の先につけ、水を含ませ火を叩く バレンとは、ボロ布を板ではさみ、フジツルをつける。水を含ませて斜面をひきずる。
5. タネマキ (播 種)		ツツミ・メジルシグイ	
6. アラハタウチ (耕 起)	ハタケウチ シロナラシ (整 地) ヨセグサ (残滓物 除去)	カスタ シバホウキ・コマザラエ・ヒブラ ハネマタ →  自然 キエゴ 木の シジメガマ 又	<ul style="list-style-type: none"> カスタとは刀の形が方形ではなく、三角に近い形の焼畑専用鎌 ギエグサは腐らないので、キエゴの中に入れて、畑地外へ放る。 焼いても、打っても残るグズンバル(クズの根)は鎌で切る。
7. クサトリ (除草と間引き)	一番草 2番草 3番草 トメグサ (タナグサ)	カスタ・ハネアゲ →  キエゴ・シジメガマ ワラカブ・ボロカブ	<ul style="list-style-type: none"> 一・二番草時はワラカブで蚊(ブドウ)を、三番草・トメグサ時はボロカブでウルリを駆除する。
8. ホートリ (穂収穫)	穂を摘む 穂の収納 運 搬	竹製 ツンベラ 木製 ガンギ・ガンビ その他 チャワンノカケ・ツメゴキ・ チャット・カミソリ・ハサミ・ ホガマ・アセカリガマ ヘエオコシ キエゴ・テゴ・テゴフタ セナカテ・ニーナワ・ガンザ(男) ヒデリミノ(女)・セイタ・ネンジャ	<ul style="list-style-type: none"> 雨天時には、ドミノ・ニゴザ・ハリカサを使用する。

工 程	小 工 程	使 用 農 具	備 考
9. ホーホシ (穂乾燥)	野外で天日 乾燥 屋内でツリ アマボシで 乾燥 屋内でジロ アマボシで 乾燥 ツリ・ジロ 両アマボシ に共通な付 属品 火を燃やす のに必要な もの 緊急時の防 火用水の準 備	ムシロ ツリアマボシ (ドウイタ・ス) ・ヒノエ ジロアマボシ (ハシラ・ドウイタ・ハリ・ス ・クルマ) ハシゴ・ニアゲグルマ・カマザオ・アマボシ ガエシ・ミ・テゴ・アマガミ (アマガヤ) ・ ムシロ カサズク・バケモノカギ・アマボシパイタ アイダキ・マクラ・ジロトビ 1斗ダル・バケツ・キカギ	・大部分の家では、ツリアマ ボシで乾燥したが、ジロア マボシもあった。 
10. ホガチ (脱 穀)	アラウチ コナウチ ウスガチ	カリヤス・シキムシロ・ウワムシロ・アラウ チバイ・ヘエウチバイ・カキベラ・ヤツメカ ゴ・ミ・テゴ ヨコツチ ホガチウス・ヘエカチギネ・ウスブタ ヘエジャクリ	コナウチ・ウスガチの際も、 ヤツメカゴ・ミ・テゴは使用 する。
11. タテビエ (調 整)	タテビエに よる時 トウミによ る時	マタギ (タテザオ) ・ヨコギ (ヨコザオ) スギカワまたはタケズ・ババコシキ・ムシロ ・ミ トウミ	 脱穀したものを、ババコシキ ですくってタテビエの装置に 投げつけ、重量差によって選 別する。
12. 貯 蔵		カマス { ホウネンガマス (5斗) ハンガマス (2斗5弁) シオガマス (2斗) ミ・ムサマス・フダ	

3. ヒエナギの工程と使用器具

ヒエナギは、火入れ初年次にヒエを作るわけであるが、耕作過程の中でどのような具体的な農具が使用されたかに関して、旧新丸村小原集落の伊藤常次郎、伊藤市平両氏の事例で表3で示した。これは、別視点では、どのような農具によって、焼畑技術が構成されていたかの資料でもある。なお、耕作過程の工程名は、大日川水系と牛首川水系の白峰村では若干の差があるので、この表で提示したものは、大日川水系の焼畑事例であるので、ことわっておく。

表4 焼畑の経営主体である出作りの垂直的分布 (田中・幸田, 1927による)

海 抜 高 度	出作り戸数	百分比
m	戸	%
300～400	33	4.2
400～500	76	9.7
500～600	108	13.8
600～700	211	27.0
700～800	168	21.5
800～900	126	16.1
900～1000	45	5.7
1000～1100	16	2.0
合 計	783	100.0

ヒエナギ1年次のヒエ栽培 (平成4年時の記録)



写真-2 火入れ前の準備作業
ヤキシロに燃え易いスギンバ、カヤを補給し、さらに防火帯をきれいに掃除する。



写真-3 火入れ儀礼
東部斜面にハプロ(ミヤマカワラハンノキ)の木を一本残し、テングサン(山ノ神)に焼畑をする数年間、遷移してもらう(ゴザをゆずってもらう)。竹銃子(タカジョウシ)に御神酒を注いで、その後に点火する。

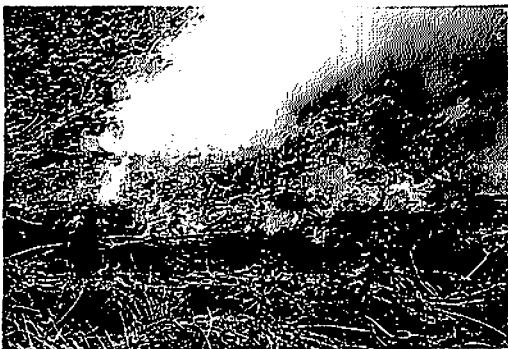


写真-4 火入れ作業
イブリを操作して、火が水平状態で燃えるように調整をしながら、上部より下部へ焼き下ろす。



写真-5 除草作業
二番草、除草と間引きを兼ねて作業する。

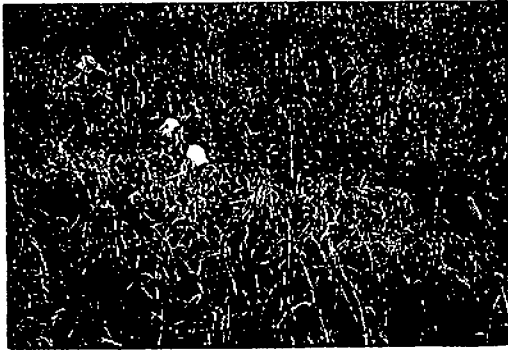


写真-6 収穫作業
穂だけを刈り取って、腰につけたキエゴの中に入れる。



写真-7 坪刈り作業
焼畑1坪当りのヒエ株数、収量を計測する作業も試みた。

4. 焼畑の立地

手取川上流域は、大別して、本流の牛首川水系と支流の大日川水系・尾添川水系に分けることができる。すべての山地が、焼畑用地として利用できるわけではない。例えば、斜面が急傾斜であれば農作業はできない。また尾根筋は、地力は必ずといってよい程劣っているので、焼畑利用を避けている。さらに、焼畑地造成のため樹木伐採をすると雪崩を誘発するような地形では、焼畑利用を避けてきた。焼畑に適する山地は限られ、手取川本流・牛首川水系や大日川水系では「ムツシ」、尾添川水系では「アラシ」という呼称が優勢である。焼畑を営んできた人は、海拔高度・傾斜・植生・地形・土質等の諸条件を感覚的、あるいは体験的に総合判断し、焼畑と取り組んできた。

以下、ムツシを構成する諸要素別に概説する。ムツシを構成する要素とは、とりもなおさず、山地のどのような場所が焼畑に適するのか、山地のどのような場所を焼畑として利用してきたか。問題に通じることになる。

海拔高度

田中啓爾・幸田清喜両氏は、明治43年測量の5万分の1地形図より、出作り住居を判読し水平的分布と垂直的分布を考察した(田中・幸田, 1927)。焼畑は、出作りによって経営される場合が殆んどなので、おおまかには、出作りの分布は、焼畑の分布と考えても妥当性が高いと思う。出作りの垂直分布によれば、500~900mの間に最も多く分布しており、出作りは300~1100m間に限られている(表4)。したがって、田中・幸田の調査資料のように、白山麓の焼畑の高度限界も、出作りの高度限界1100m付近にあったものと考えたい。

白山麓の各谷筋には、焼畑民が幾世代にもわたり、焼畑を繰り返した結果、これ以上の海拔高度の場合、生産性が極端に劣るといふ高度限界が存在する。この高度限界を、白峰村大杉谷苛原、大道谷五十谷では「ツクリザカイ」、旧新丸村須納谷(現小松市花立町)では、「クワイリザカイ」と言っている。この高度限界より以高地、すなわち海拔高度が高いので気候的環境が劣化してくる。山地領域を、苛原では「サンリン」、五十谷では「ダケ」下田原山では「サンカ」等とばらつきが目立っている。山地領域中、焼畑適地語彙と、海拔高度が主要因で焼畑不適地となった山地領域語彙、および常畑呼称に関しては表5で示した。「作り境」「畝入り境」という言葉は、一つの谷筋のこれより奥地の源流域は、標高が高いので諸条件が劣化して、焼畑がむつかしいという

表5 焼畑適地・焼畑不適地・常畑の故障一覧

水系	村落	伝承者 生年	高度限界線以高地の 焼畑不適地	焼畑適地	常畑
牛首川 東谷	白峰村 赤岩	加藤 勇京 明治29年	サンカ	ムツシ	キャーチ
	三谷	加藤 正信 明治44年	キリ	ムツシ	キャーチ
	河内谷苛原	長坂吉之助 明治28年	サンリン	ムツシ	キャーチ
	河内谷大谷	愛岩 富士 明治39年	ダケヤマ	ムツシ	キャーチ
	大道谷 五十谷	尾田 清正 昭和6年	ダケ	ムツシ	キャーチ
	赤谷	久可久四郎 明治39年	サンカ	ムツシ	ジャーラジ
	下田原山	山口清太郎 明治36年	サンカ	ムツシ	ダイラバタ
	下田原	兵井 庭一 明治43年	ダケヤマ	アラシ ムツシ	ジャーラジ
	尾口村 東二口	山内 行雄 昭和5年	アラヤマ	ムツシ	メグラバタ センザイバタ
大日川 西谷	旧新丸村 木地小屋	道見 鐵助 明治38年	サンリン	ムツシ	キャーチバタ
	花立	橋爪 忠一 明治32年	サンバク フカヤマ	ムツシ	ハタ
	小原	伊藤常次郎 大正11年	アラヤマ	ムツシ	ハタケ キャーチ
尾添村	杖	仲間 菊能 明治44年	アラヤマ	ムツシ	ムシバタ
	尾口村 東荒谷	小田 孝太 明治44年	サンリン	アラシ ムツシ	ザイショバタ センザイバタ
	尾添	鶴尾伝兵衛 明治31年	——	アラシ	ムシバタ(ケ)

表6 白峰村における1000m以高地の出作り地

水系・谷系	出作り地	標高	斜面方面
大杉谷	松左衛門山	1,350m	SW
	柳谷	1,200	S
湯谷	庄五郎山	1,200	S
	庄兵衛山	1,200	S
牛首川河内谷	英濃山	1,170	S
大杉谷北俣谷	与八郎山	1,100	S
大杉谷	七右衛門山	1,080	S
	石吉山	1,070	S
大杉谷北俣谷	小新右衛門山	1,070	SW
牛首川赤岩	富(とめ)山	1,070	S
明谷	市兵衛山	1,050	W
牛首川赤岩	富ノオジ山	1,040	SW
大杉谷北俣谷	伍助山	1,030	S
大杉谷北俣谷	清八山	1,020	SW
大道谷細谷	孫左衛門山	1,000	W
大道谷太田谷	三太山	1,000	S



写真-8 白峰村大杉谷右岸山地のムツシ、左岸の苛原、愛宕末太郎家出作りより望む。杉植林地がムツシ、焼畑跡地に杉を植林してムツシに還元しなかった場所。杉植林地上限が約1000m、その上部はブナ林。

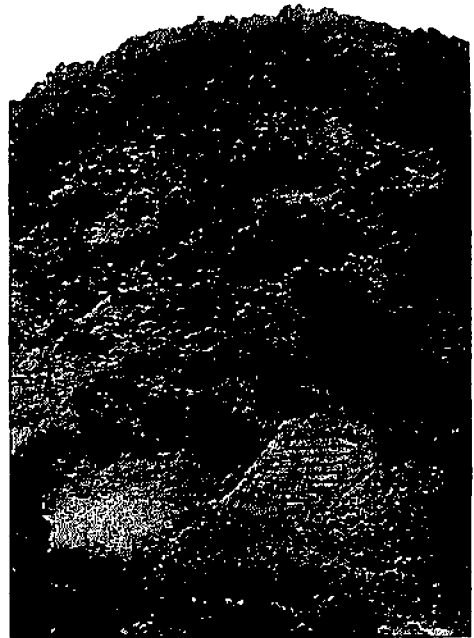


写真-9 白峰村、下田原セイシ山のムツシザカイ尾根筋より少し下った所に、植生差が歴然としている所がムツシザカイで、それより低い場所を焼畑に利用した。



写真-10 小松市小原町のオワン谷のハエザカイ 焼畑利用地と不利用地の境、樹木のはえ方が一目瞭然で、差が見られる。

限界線である。「作り境」と非常によく似た語彙に「ムツシザカイ」・「ハエザカイ」等のまぎらわしい境界線がある。例えば、大道谷五十谷の通称「忠ノ山」の小屋場は標高785mにある。この小屋場の真上の尾根筋に小さなブナ林がある。このブナ林は雪崩防止のため、永代にわたり伐採をひかえたため原生林化し、その下部斜面のムツシとの間に、極端な植生上の相違があらわれる。この植生上の境界を「ハエザカイ」・「ムツシザカイ」とよぶのである。補足すれば、出作り地「忠ノ山」のハエザカイは、とりもなおさず忠ノ山のツクリザカイである。しかし、忠ノ山を含めた五十谷筋の焼畑耕作限界線は、遙か源流域の小石小屋場(標高940m)、清八小屋場(標高990m)付近に存在する。

千葉徳爾氏は、山地小地名を地形図と照合しながら調査し、焼畑残像地名(出作り地名)が1200mまで及ぶことを把握された(千葉, 1975)。その後判明した1000m以上高地の出作り地名と、極高の出作り地名を加えて、表6で示した。極高の出作り松左衛門小屋場の標高は1350m, 大杉谷大滝下流右岸にあり、かつて、苛原に在住した長坂吉之助によれば、髻をゆった松左衛門が、白峰集落より苛原経由で季節出作りをしていたという。松左衛門小屋場は、白峰より地形図の水平距離で約9kmもあり、積雪期における小屋除雪のための往復は不可能で、家屋は地面に屋根をおいたネブキ形式であったと推察する。

植生

焼畑体験者は、「ムツシはシノギが生え、焼畑未利用地(不適地)には、タイボクが生えている。」あるいは、「ムツシにはネゾレが生え、焼畑未利用地にはタチキが生えている。」と伝承している。

シノギとは、雪が5・6mも積った積雪期、すっぽりと木の全容が雪に埋まってしまう樹高の低い木々の総称である。ネゾレとは、写真11のように、幹が垂直状に生長することなく、多量積雪の影響もあって、幹が根元より傾斜面に這うように生長し、頭をもたげるように繁茂した木々の総称である。シノギ・ネゾレは、言葉は違っていてもその対象とする木は同じで、雪の圧力で根元が曲がった低木である。具体的には、牛首川水系では、マルバオバルともサワオバル・ムツシオバル、さらに省略してオバルとも言っている。ミヤマカワラハンノキや、ババウツギ(タニウツギ)・リョウボ(リョウブ)等が該当する。牛首川水系で言うオバルは、大日川水系ではハプロと言っている。そして、これらが群落を形成する時はシノギワラ・ネゾレワラとよび、焼畑用地として最適としている。

焼畑未利用地のタイボクとは、いわゆる大木で樹高が高い樹木である。タチキとは、普通の立

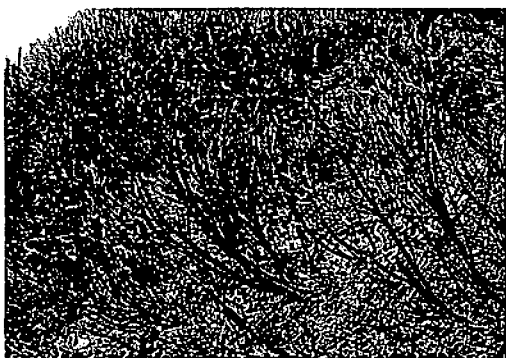


写真-11 ムツシの代表的植生 その1
牛首川水系ではオバル、大日川水系ではハプロというミヤマカワラハンノキ群落地で、最も肥えるムツシとする。

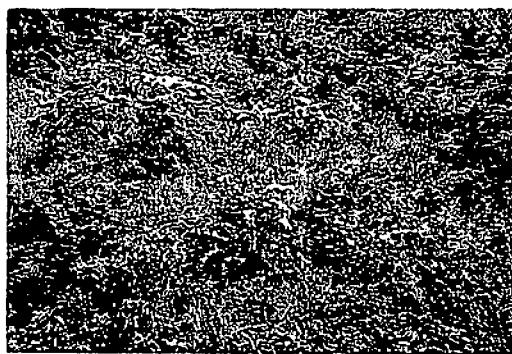


写真-12 ムツシの代表的植生 その2
背の低いネゾレ、具体的には、ババウツギ(タニウツギ)が群落をなしている。

木状樹木で、共に積雪期にはその全容が雪に埋まることはない。これらの群落は、タイボクワラ・タチキワラと言っている。具体的には、寒冷な場所にはブナ・ナラ(ミズナラ)が、地力の劣る場所にはクリ・ハウソナラ(コナラ)が生えるとして、共に焼畑には不向きと位置づけしている。実際上は、ムツシには低木のネゾレワラばかりでなく、立木状のタチキワラも利用してきた。その折、タチキに関して、「ポブラギが生える場所は、地面が肥えている。」とも「ヤコギが生えている場所は、土地が肥えている。」と体験者は伝えている。ポブラギとは、ポブラ(カボチャ)のように芯が抜けているような様に例えて、めの粗い材質の樹木を指す。同じようにヤコギとは、材質の軟らかい木を指す。ポブラギ・ヤコギとは、具体的にはキワダ・トチ・コクルビ(サワクルミ)・ハンノキオバル(ヤマハンノキ)等で、これらのタチキは肥えた場所の指標木として、タチキワラを判読する基準としていた。対するに、材質の硬い木をカタギと言い、カタギは瘦せた場所の指標木とし、特に「ナラワラのテンテコ地面」、「ネソワラのテンテコ」と言って、ムツシとして積極的に利用しない。ナラワラの「ナラ」は、ミズナラ・コナラを総称している。ネソワラの「ネソ」は、マルバオバルを指し、合掌屋根の小屋組の結束に使う灌木として広く知られている。テンテコ地面とは、土が硬くて鍬を使っても土中にはいらぬ様子を形容した語彙である。

ムツシの植生生態に関する伝承では、ムツシに生える優生樹は、多雪地帯特有の根元で屈曲した低木群落である。低木群落は、マルバオバル・ババウツギ・リョウボであり、和名に代えればミヤマカワラハンノキ・タニウツギ・リョウブである。これらの低木群落は、焼畑のため伐採し一時的に植生が消滅した場所に、好んで繁殖する代償的植生である。そしてマルバオバル等は、2・30年経過しても直径が15cm位の太さ以上にならず、その代りに株分けで細い幹を数多く立てて生長するので、適宜な休閑年数を経過した後、焼畑として利用のため伐採するには好都合であった。補足すれば、焼畑民が、白山麓の原生植生生態に最初に斧を入れた時点では、マルバオバル・ババウツギが優生であったのではなく、焼畑放棄地にマルバオバル・ババウツギが最初に生えつき、優生樹となったものと思う。この辺の焼畑休閑地の植生に関して、福井勝義氏は、焼畑とは、森林植生の遷移を人為的に作り、これを積極的にとりこんだ農法であると位置付けている(福井勝義 1983)。

伝承者は、マルバオバル・ババウツギは「草と木のアイノコだから葉が腐りやすい」としている。伝承の意味する内容は、マルバオバル・ババウツギは、草にも木にも属さずその中間的存在とする。例えてみれば、動物・鳥にも属さないコウモリのような木としている。その最大理由は、葉の実態が証拠であるとする。マルバオバル・ババウツギの葉は、ブナ・ナラ類の葉のように小型ではなく大型で、葉肉は草ほどでもないが柔らかいのを第一の特色としている。第二の特色は、樹木は紅葉期には緑色から完全にもみじ色に変色し、葉肉には水分がなくなりかさかさとなって落葉する。マルバオバル・ババウツギは、葉の緑色が少し黄色をおび、葉肉も水々しく柔らかいまま落葉する。したがって、マルバオバル・ババウツギの落葉は腐食しやすく、毎年繰り返すことによって腐植層が厚くなって肥えた土ができる。さらに伝承者は、秋の紅葉期に木の葉が黄色や真紅にもみじ色に変色する木を総称して「ハシケ」と言い、タチキ・ハシケの葉の大きさは、マルバオバル・ババウツギに対して3分の1位と小さく、加えて水分に乏しくかさかさしており、地表面の落葉は腐食するが腐植層はマルバオバルと比較して、肥えた土にならないと指摘している。

白峰村ではオバルについて、ネゾレとタチキに二分して区別することは前述した。ネゾレのものは、和名はミヤマカワラハンノキである。タチキのものは、ハンノキオバルと言い、和名はミヤマハンノキである。そしてミヤマカワラハンノキ群生地を、よく肥えた最上位のムツシとして

評価している。ハンノキの根には、放射菌と思われる微生物が付着し、それが空中窒素の固定作用をおこなってハンノキに与え、ハンノキの生長と山地土壤に良い影響を及ぼしているとされている。つまり、ハンノキの根はレンゲソウが水田に好影響をもたらしていると同じ役目を、焼畑休閑地のムツシに与えているのである。このことに関連して、白峰村下田原筋の作りの中には、焼畑休閑地に杉を植林する際、杉の苗木の間にミヤマカワラハンノキを試験的に植え、杉苗木の生長を促すことをはかった者がいたという。

ムツシに積極的に利用する樹林相は、ネズレ・シノギの呼称で呼ばれる低木樹林地である。ところが、樹木がまったく生えず草しか生えない場所もムツシとして利用し、旧新丸村杖(現小松市津江町、廃村)ではクサムツシ、白峰村大杉谷ではクサワラ、白峰村大道谷五十谷ではノマクサワラと言っている。因みに、ナマクサワラの「ノマ」とは、雪崩が発生する急斜面の小谷を指す地形語彙である。伝承者は、木が生えず草地となる理由として、毎年積雪期には雪崩が起り、その圧力で木の根が根付かないことをあげている。さらに、もう一つの理由として、水分・湿気が多すぎて木の根が根腐れを起して、根付かれないとしている。そして、水分過多の場合は、少し深い部分が灰色もしくは薄青色の粘土質になっているという。

クサムツシ・クサワラの植生は、イタドリ・アザミ・フキ・ウド・オオウド(シシウド)・ウシのクチャ(ザゼンソウ・ミズバショウの総称)等で、これらの草を総称して「ノマクサ」と言っている。このような植生の斜面地表部は、ムツシとして土質も柔らかく、地力が肥えるとし、特にウドがよく生えている草地を最上肥沃地として位置づけしている。このように草だけの植生のムツシは肥えているが、焼畑の火入れ作業時には、燃料素として燃えるものが少なく、「切り込む」と言って他所より燃料素を運ばねばならず、手数が多くかかった。

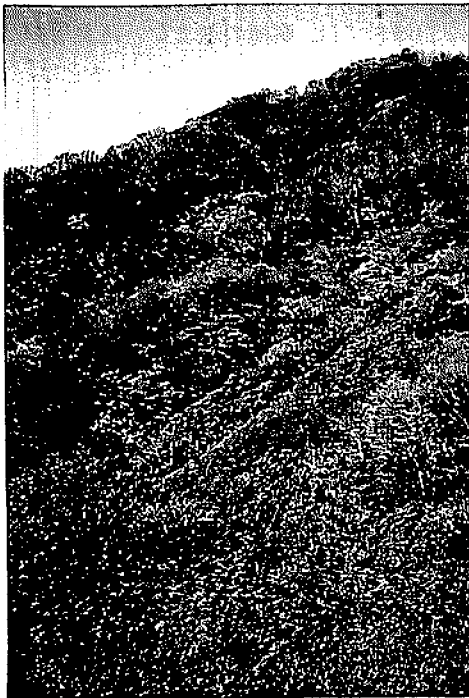


写真-13 大田和谷のクサムツシ
下半部の草だけの斜面がクサムツシ
で、全体に20度以上もあり、急斜地。



写真-14 白峰村大杉谷大空のツツレ
厚さ10センチのツツレは、持ちあげても、細根が網の目に走っており、バラバラにならない。

ツツレワラ・ジャムネワラ

サンカ・ダケヤマ・アラヤマ等の焼畑不利用地は、瘦せた土壌、長い根雪期間、低い気温等が、焼畑作物に影響するのであるが、伝承者はさらに不利な条件として、焼畑に利用しようにも土が露出していない場所がひろがり、どうにもならないとしている。

伝承内容を総合すると、「土が出ない」という実態は、ブナ林やナラ林では、落葉がピッシリと幾重にも積もり、厚い層となり落葉のじゅうたんを作って、斜面を覆うために土が露出しないのである。その原因として、落ちる葉の分量より、腐る分量が少ないからであるとし、葉の腐りにくい理由として三つをあげている。理由の第一は、落葉のじゅうたんができる場所は、尾根筋や斜面上部の風の強い場所で、このような所は乾燥しやすく水分が少ないので腐りにくい。理由の第二は、尾根筋・斜面上部は海拔高度が高く、より寒いので腐りにくい。理由の第三は、落葉のできる林はタイボワラで、木そのものが高く大きく、だから多量の葉を落とし、さらにブナ・ナラ系の落葉はカサカサしている上に、大木は若木より老いているため硬く、非常に腐りにくい等である。

腐植の進まない落葉のじゅうたんに関して、白峰村大空のムツシ事例で説明する。休閑年数が長いムツシの植生は、高木のタチキと、林床低木のシバに大別できる。タチキの優生樹はナラ(ミズナラ)・イタギ(イタヤカエデ)で、たまにブナが混ざっていた。シバは、ツツジ(ヤマツツジ)・シタマガリ(サイゴクミツバツツジ)・フクラシバ(アカミノイヌツゲ)・イワナシ(イワナシ・アカモノを総称)等が代表である。シバの根は、一般的な木の根のように数少ない太い根が垂直状に地中に下ることをさせず、数多くの細い根が網目状に水平的に地表に沿ってはびこるのである。このシバの根が、腐植の進まない落葉層を、キルティングした縫糸の役目を果たす。したがって、落葉層を地面からはがそうとすると、シバの根がはびこっているため部分的にはめくれず、広いじゅうたんの一端を持ってまくったような状態となる。白峰村では、腐植の進まない落葉層を「ツツレワラ」と言っている。旧新丸村小原では「ジャムネワラ」と言っている。ジャムネとは、林床で水平状に広がるシバの根を指す。タチキの根は、垂直状にのびるので、野菜のゴボウに似せて「ゴンボネ」と命名している。

焼畑体験者のツツレワラ対処法は、一様ではない。白峰村大杉谷苛原の長坂家の場合、ブナツツレは焼畑に利用するが、ナラワラは痩せているとしナラツツレは焼畑利用を避けている。白峰村大杉谷大空の愛宕家のムツシには、ブナツツレがなくナラツツレがある。火入れに先だつ伐採時、鎌でナラツツレをはぎとる。この作業を「ツツレのエンギリ」と言い、十分に乾燥した後火入れ作業をおこなってから燃やした。白峰村北俣谷の永井竹男家の出作り小屋場は、標高1070m、ムツシ表面の半分は、ツツレワラとなっていた。永井家では、ツツレのエンギリ作業はしなかった。火入れ作業は、晴天が続きツツレが良く乾燥した後に実施し、普通のムツシの2倍位の時間をかけて、ゆっくりとツツレを燃やしながらか火をイブリで調整した。事例のように、ツツレワラは、絶対的な焼畑不適地としての条件ではなく、除去のための集約的労働力を長時間費せば、ムツシとして利用可能なのである。白山麓のブナ帯は、かつては300m付近にも分布していたと推察されているから、白山麓で焼畑民が、最初に樹林に斧を入れた際には、林床にはツツレワラがあったと推察する。ツツレワラ・ジャムネワラの実態は、落葉が半腐植のまま厚い層を形成してる様で、森林土壌学でいう「ポドソル」土壌の実態そのものである。この半腐植のままの腐植層は、雨水や融雪水により水に融けやすいアルカリ成分が溶けて下層にしみこむため、非常に酸性が強く、農耕にふさわしくないのである。とにかく、タチキワラに発生するジュウタン状のツツレワラは、焼畑の最初の段階すなわち伐採・火入れ作業時、鎌で切れ目を入れて起して細分化したり、

そのままの状態では火入れ時多大の時間をかけて焼却する等、集約的労力をかけて消去しなければならなかったのである。

土質

体験者は、ムツシの土質に対し、直感的に良悪・肥沃度を判定してきた。伝承内容を総合すれば、肥えた上位質の「ジョウデン」と、痩せた下位の「ハクデン」の二つに大別して、おおまかにその肥沃度を把握した。

ジョウデンの表層は、黒色・黒褐色の土「クロ土」が層をなし、踏み入れた足に感覚的に柔らかくあたるとしている。クロ土層の表層に角ばった黒色の小石が一面にひろがっている時があり、この小石を白峰村大杉谷では「ゴウロ」、白峰村大道谷では「ジャレイシ」、旧新丸村では「マナゴ」といい、ジョウデンでも上位の肥沃地と位置付けしている。この黒色をした小石が、崩れて肥えた土となるのだとしている。ハクデンの表層は、赤褐色をおびた土「アカ土」がひろがり、水分も少なく、踏み入れた足に硬くあたるとしている。アカ土は、口で味わうと苦味があるので、白峰村大杉谷では「ニガ土」とも言う。ハクデンには、キツネノカズラ(ヒカゲノカズツ)やイワナシ(イワナシとアカモノを総称した呼称)が生えるとし、ハクデンでも下位の非常に痩せた土地と位置付けている。肥えた上位のジョウデンと、痩せた下位のハクデンの中間位のムツシとして、旧新丸村小原では「シラハタ」があり、その土は薄い青色・緑色で粘土質であるという。白峰村赤谷出作り群では、ジョウデンの指標草類はアザミ・ウド、ハクデンはトリアシ・メガヤ、中間のムツシはフキ・オガヤとしている。

ムツシの土壌は、森林土壌学上は褐色森林土が殆んどである。ジョウデンの表層のクロ土とは、いわゆるA層と呼ばれる黒色の腐植層である。この層は、落葉や落枝等が微生物による分解・腐植で作られたもので、土を柔らかくする作用をもち、さらに窒素分を多くさせて肥えさせる役目をする。

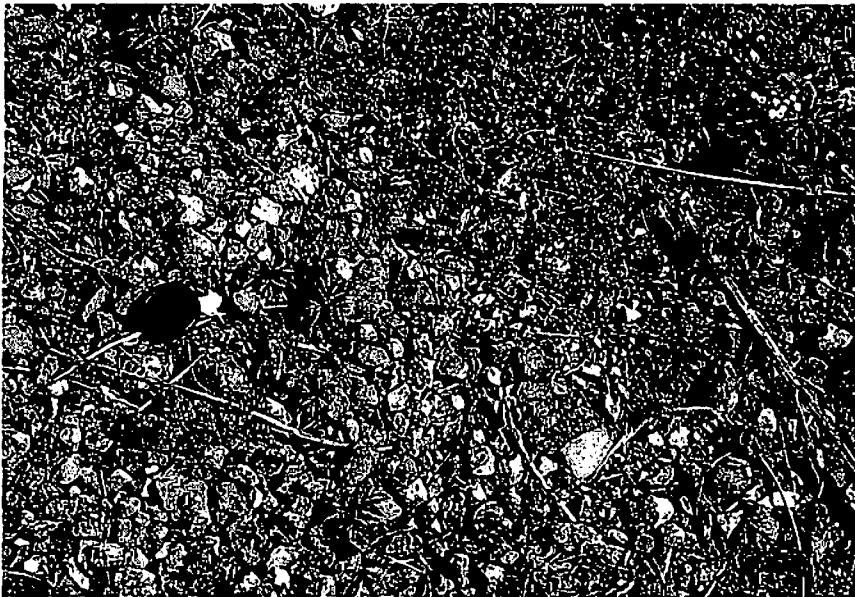


写真-15 ジョウデン表層のジャレイ石

カメラのレンズキャップとくらべてみると、耕地とは思えない状況である。

クロ土に混入する「ゴウロ」・「ジャレイシ」・「マナゴ」等と呼ぶ角ばった小石は、森林土壌学上「角礫」と命名されているものである。角礫は、斜面上半部の基岩が崩壊し、斜面下半部へ移動してきた崩積土中に含まれるとするが、実際には斜面上半部・下半部を問わず、表層土の上にひろがっている時も多い。角礫が適度に混入すると、土が緻密に接することが少なく、間隔がでしやすい。そして、土壌中の水・空気の移動が容易になり、焼畑作物・植林樹の根育成にとって有利な条件となるのである。

参 考 文 献

- 千葉徳爾(1975) 白峰村の小地名一特に出作り地名について一.石川県白山自然保護センター研究報告第2集
- 福井勝義(1983) 焼畑農耕の普遍性と進化一民俗生態学的視点から一.日本民俗文化大系5,小学館.
- 伊藤常次郎・橘禮吉(1977) 白山麓小原一生活と民具一.19号.
- 大政正隆(1978) 土の科学,日本放送出版協会.
- 佐々木高明(1972) 日本の焼畑,古今書院.
- 菅原清康(1980) 焼畑農法における作付体系とその成立要因に関する研究,農作業研究.38号.
- 田中啓爾・幸田清喜(1927) 白山麓に於ける出作り地帯(一)(二),地理学評論第3巻4・5号.
- 橘 禮吉(1983) 白山麓・焼畑農家の雑穀穂乾燥用造り,石川地域研究4巻.
- 橘 禮吉(1987) ムツシの呼称とその意味,石川県白山自然保護センター研究報告第14集
- 橘 禮吉(1988) ムツシの環境的条件,石川県白山自然保護センター研究報告第15集.
- 橘 禮吉(1991) 白峰村の焼畑・出作り,白峰村史第3巻.